

水草の標本

角野康郎

ヒルムシロ属植物の標本を調べるために、日本の主な標本庫を見て回った。熱心な採集者の努力で、立派な標本が何点も収められていることは事実だが、陸上植物に比べると水草の標本はやはり少ない。水の中のものを探集するのは、それなりの準備がないと容易ではないし、かりに採れたとしても、花も実もない切れ端にすぎないということで、整理されることなく眠ってしまったものも多いのだろう。

標本の重要性については、ここで繰り返す気はないが、分類学の研究材料として、分布を知る資料として、さらには生態学の資料としてさえ、なくてはならぬものである。また、報告書や分布に関する報文が出されたとき、標本が残されているか否かでその価値はずい分ちがってくるものだ。

それはさておき、ここでは、私がいくつかの標本庫をのぞいて気のついたことを、少し書きとめておこう。

まず、標本の採集地がたいへん片寄っていること。つまり、分類学の研究者がよく訪れる地であるか否か、あるいは、地元で熱心な採集家がいるか否かによって、標本の産地にもすごくむらがあるのである。例えば九州の場合、福岡県や熊本県で採れた水草の標本はかなりあるのに、大分県や宮崎県で採れた標本は、わずかしか標本庫に入っていない。

これは、大分県や宮崎県には水草が少ないということではなく、水草まで対象にする熱心な採集者がいなくて（おられたとしても、その標本が手元に眠っていて）、誰にでも検討される形で保存されていないということだけのことなのではないか。いや、ひょっとすると宮崎県や大分県には分布の限られる植物があるのかもしれない。しかし、そういう事実を知るためにも、その地方である程度の標本が採集されているということが前提になる。

次に気付いたこと。それは変わった植物はよく標本にされるが、ありふれたものはなかなか標本にしてもらえないということ。国立科学博物館へ行ったとき、金井弘夫先生から、ナズナの標本というのはほとんど入っていないんですよと聞かされた。同様のことが水草についてもあてはまる。下表は、東大、国立科学博物館、京大の標本庫に入っているエビモ、ヒルムシロ、フトヒルムシ

ロの国内産標本点数を示している（1979年分まで）。

	東大	科博	京大
エビモ	15	15	65
ヒルムシロ	31	40	62
フトヒルムシロ	21	38	110

限られた場所にしか生育し得ないフトヒルムシロの標本が多くて、どこにでもあるエビモの標本が少ないというのは、どういう訳だろう。フトヒルムシロは、採集家が採集を目的として歩くような山道沿いの池や湿原に生育するので採集される。一方、エビモはすぐ身の回りにありふれているので特に採集の対象にはならない。標本の必要性はわかっている、いつでも採集できると思っているから、ついつい採らずじまいになってしまうということなのだろう。ヒルムシロはこの中間で、田舎道を歩くとあちこちにあったので、そこそこ採られる機会もあったのであろう。

私もあちこちへ調査に出かけるが、一人で歩き回れる場所など本当に限られている。昨年、北海道へフェリーで車を運んで一月近く調査旅行をした。それでも帰ってから調査地を地図上にプロットしてみると、まさに点々であって線にもならず、ただ、ため息がでるばかりであった。やっぱり地元の人が時間をかけて調べるのが一番なのである。

標本を作り、それを管理するというのは確かに手間がかかり、めんどうなことではある。しかし、もう少し意識的かつ組織的に水草の標本が作られるならば、日本の水生フローラについてももっともっと多くのことがわかり、未解決の問題を解明していくための貴重な基礎資料になるであろうことは間違いない。

標本は生殖器官をそなえたものである必要はない。そんなことを期待するのは無理な種類も水草には多い。断片でもよい。いつ（日時）、どこで（産地）、誰が（採集者名）採ったのかという記録さえ正確であれば、それなりに立派な資料たり得る。

日本の水草研究の発展のために、この水草研究会の果たす役割があるとすれば、標本資料を蓄積し、有効に活用できる体制をつくっていくことも一つの課題なのではないだろうか。